

文化大革命の起源と中央・地方関係

磯 部 靖

問題の所在

本稿は、中華人民共和国（以下、現代中国と略称）の歴史に多大なる影響を及ぼした文化大革命の起源を、中央・地方関係の視点から考察することを目的とする。

文化大革命の起源については、現代中国政治をめぐる最も重要な問題の一つとして、数多くの研究者が様々な角度から解明に取り組んできた。例えば、毛沢東と劉少奇¹⁾の間の路線対立²⁾、社会主義教育運動をめぐる確執³⁾、大躍進政策の挫折による毛沢東の疎外感⁴⁾、毛沢東が抱いた資本主義勢力復活や修正主義出現への危機感⁵⁾、米ソ両国を中心とした対外的脅威⁶⁾などの観点から幅広く探究が行われてきた⁷⁾。

ところで、周知のように、文化大革命発動直前に毛沢東は、「北京には針一本刺すことができない、水一滴通すこともできない」⁸⁾というよく知られた表現を用いて、中央で実務を取り仕切る指導者たちに対する不信感を表明した。後述するように、文化大革命発動時に毛沢東は北京におらず、地方からそのための指示を発していた。また、毛沢東の庇護のもと、文化大革命を急進的に推進することで台頭したいいわゆる「四人組」⁹⁾は、いずれも上海を拠点としていた。それに加えて、毛沢東は最高指導者でありながら、以前から多くの時間を地方で過ごし、地方に身を置きながら政策を考案し、他の中央指導者たちに指示を与えながら政権運営を図る特有の統治スタイルを貫いていた点は注目に値する¹⁰⁾。

以上のことから、多くの時間を地方で過ごす毛沢東と、北京で実務を取り仕

切る劉少奇をはじめとする他の中央指導者たちとの間の物理的距離が、文化大革命へと至る政治の動向に何らかの影響を及ぼしたのではなかろうか。換言すれば、毛沢東のこうした特有の統治スタイルに起因する物理的距離が他の中央指導者たちとの心理的距離を次第に醸成し、彼らに対する当初の信任から不信そして批判へと結び付き、文化大革命の発動へと至ったのではなかろうか。

そこで本稿では、多くの時間を地方で過ごす毛沢東と北京で実務を取り仕切る他の中央指導者たちとの関係性に着目し、そうした関係性が文化大革命の発動に影響していったのではないかという視点に基づき考察を行っていく。具体的には、第1節で、多くの時間を地方視察に費やす毛沢東の行動パターンの背景や他の中央指導者たちへの認識を、第2節で、毛沢東が他の中央指導者たちに対して次第に不信感を募らせ、ついには地方から文化大革命を発動するに至る過程を検証していきたい。なお、本稿の主たる考察対象時期は、大躍進政策から経済調整政策¹¹⁾への転換が鮮明となった1961年後半から、文化大革命発動に至る1966年前半までとする。

第1節 地方視察主体の毛沢東の行動パターン

1961年9月24日に毛沢東は武漢にて英国陸軍元帥モンゴメリーに対し、今では北京に多くても年に4～5か月しかおらず、それ以外の期間は地方視察に費やしており、中央のことは劉少奇たちに任せていて、自らが毎日政治を取り仕切っているわけではないと語っている¹²⁾。このように毛沢東は多くの時間を地方で過ごし、政治の実務は劉少奇をはじめとする他の中央指導者たちに取り仕切らせていた。なぜ毛沢東は最高指導者でありながら、地方で多くの時間を過ごす政治スタイルを旨としていたのであろうか。本節ではこの問題を解明するために、まずは毛沢東の地方視察主体の行動パターンを検証し、それを踏まえて、その背景にある他の中央指導者たちに対する毛の認識などを考察したい。

1. 地方視察のスケジュール

毛沢東はどの程度の頻度で地方視察に出かけ、そのコースはどのようなもので、期間はどのくらいに及んでいたものであろうか。以下では、これらの点を明らかにすることで、最高指導者でありながら地方で多くの時間を過ごした毛沢東特有の統治スタイルの一端を描き出したい。

(1) 1961年7月5日—9月27日¹³⁾

①期間中の重要会議

* 廬山：中央工作会議（1961年8月23日—9月16日）

②期間中の主な滞在地

- ・ 上海：7月10—11日
- ・ 杭州：7月11日—17日，8月14日—21日
- ・ 武漢：9月21日—24日
- ・ 廬山：7月20日—8月13日，8月22日—9月16日

③主な旅程

7月5日：北京を出発

7月6日：天津で、劉子厚¹⁴⁾ら河北省委の指導者と談話。

7月7日：済南で、山東省委の指導者と談話。

7月8日：蚌埠で曾希聖¹⁵⁾ら安徽省委の指導者と談話。

7月10日に上海，7月11日に杭州に到着。

7月17日：杭州を出発。

7月20日：廬山に到着。

8月14日：杭州に到着。

8月21日：杭州を出発し廬山に向かう。

8月23日—9月16日：廬山で中央工作会議を開催。

8月23日：中共中央地方局第一書記が参加した中央政治局常務委員会拡大会議を主宰。

9月1日：午後，中共中央地方局第一書記による報告会を主宰，周恩来や陳雲も参加。

9月16日：廬山を出発し南昌に向かう。

9月18日：長沙に到着。

9月21日：武漢に到着，王任重¹⁶⁾と農村工作について談話。

9月24日：武漢を出発。

9月25日：朝に鄭州に到着し，河南省委の指導者と談話，夜に鄭州を出発。

9月26日：邯鄲に到着し，河北省委と山東省委の指導者から報告を受ける。

9月27日：北京に到着。

(2) 1961年12月1日—12月19日¹⁷⁾

①期間中の主な滞在地

・上海：12月2日—3日，12月8日—13日

・杭州：12月3日—8日

・無錫：12月13日—16日

②主な旅程

12月1日に北京を出発し，2日に上海，3日に杭州に到着。

12月8日：杭州を出発し上海に到着。

12月13日：無錫に到着。

12月14日：許世友¹⁸⁾も同席のもと，江渭清¹⁹⁾から江蘇省の状況報告を受ける。

12月16日：無錫を出発。

12月17日：済南に到達し，譚啓龍²⁰⁾，裴孟飛²¹⁾，白如冰²²⁾，蘇毅然²³⁾ら山東省委の指導者から農村工作について報告を聴取。

12月18日：天津に到着し，劉子厚ら河北省委の指導者から報告を聴取。

12月19日：北京に到着。

(3) 1962年2月8日—3月26日²⁴⁾

①期間中の重要会議

*北京：中央政治局常務委員会拡大会議（西楼会議：1962年2月21日—23日）

②期間中の主な滞在地

- ・上海：1962年2月10日—27日
- ・武漢：1962年3月10日—22日
- ・南昌：1962年2月28日—3月5日
- ・長沙：1962年3月5日—10日

③主な旅程

2月8日：北京を出発。

2月10日：上海に到着。

2月14日：柯慶施²⁵⁾と談話。

2月27日：江華²⁶⁾，林乎加²⁷⁾，霍士廉²⁸⁾ら浙江省委の指導者と談話。

2月28日：南昌に到着。

3月2日：楊尚奎²⁹⁾，邵式平³⁰⁾ら江西省委の指導者と談話。

3月5日：長沙に到着し，孫平化³¹⁾，王延春³²⁾，胡繼宗³³⁾ら湖南省委の指導者と談話。

3月6日：孫平化，譚余保³⁴⁾，周礼（周里）³⁵⁾，徐啓文³⁶⁾ら湖南省委の指導者と談話。

3月7日：李瑞山³⁷⁾と談話。

3月8日：孫平化，王延春らと会食。

3月10日：武漢に到着，王任重と談話。

3月22日：武漢を出発。

3月23日：鄭州に到着し，陶铸³⁸⁾，劉建勳³⁹⁾らと談話。

3月24日：鄭州を出発。

3月25日：邯鄲に到着し，劉子厚らと座談会を開く。

3月26日：北京に到着。

(4) 1962年5月2日—7月6日⁴⁰⁾

①期間中の重要会議

*北京：中央工作會議（1962年5月7日—11日）

②期間中の主な滞在地

- ・無錫：5月3日—5日

- ・上海：5月5日—30日
- ・杭州：5月30日—6月8日
- ・長沙：6月11日—17日
- ・武漢：6月18日—30日

③主な旅程

5月2日：北京を出発。

5月3日：無錫に到着。

5月5日：無錫を出発し上海に到着。

5月26日：柯慶施と談話。

5月30日：午後、李富春⁴¹⁾、柯慶施、陳伯達⁴²⁾、羅瑞卿⁴³⁾と談話、夜に杭州に到着。

6月8日：杭州を出発。

6月9日：南昌に到着。

6月11日：長沙に到着。

6月14日：王任重と談話。

長沙滞在中に華国鋒⁴⁴⁾と談話。

6月17日、長沙を出発。

6月18日：武漢に到着。黄永勝⁴⁵⁾と劉興元⁴⁶⁾から軍隊工作について報告を聴取、陶鑄と王任重が同席。

6月19日：午後、王任重らが付き添い長江を遊泳、夜、陳再道⁴⁷⁾と譚甫仁⁴⁸⁾から報告を聴取。

6月20日：王任重と談話。

6月21日：午後2時、王任重らが付き添い長江を遊泳、午後6時、北朝鮮最高人民会議代表団との会見に、彭真⁴⁹⁾、柯慶施、陶鑄、王任重、伍修權⁵⁰⁾らが同席。

6月30日：王任重と談話後、武漢を出発。

7月1日：鄭州に到着し、劉建勲と談話した際に小麦の収穫状況を尋ねる。

7月2日：邯鄲に到着。

7月3日：済南に到着し、譚啓龍、裴孟飛ら山東省委の指導者と談話した際

に、河北、河南、山東各省の農業生産に強い関心を示す。

7月5日：天津で、劉子厚らから夏の農産物収穫状況について報告を受ける。

7月6日：北京に到着。

(5) 1962年12月9日—1963年2月2日⁵¹⁾

①期間中の主な滞在地

・上海：12月16日—1月2日

・杭州：1月2日—10日

・南昌：1月11日—15日

・武漢：1月20日—29日

②主な旅程

12月9日：北京を出発。

12月10日：天津に到着し、劉子厚、呉硯農⁵²⁾、楊一辰⁵³⁾らから河北省での8期10中全会の伝達状況や農村工作について報告を受ける。

12月11日：済南に到着し、譚啓龍らと談話。

12月13日：南京に到着し、江渭清が付き添い南京人民大会堂にて、江蘇省および省内各市委関係者に接見。

12月16日：上海に到着。

12月21日：華東地区各省市第一書記と談話し、8期10中全会の伝達状況や農村工作について聴取。

1月2日：上海から杭州に移動。

1月10日：江華、林乎加らと談話、杭州から南昌に向けて出発。

1月14日：江西省委の指導者と談話。

1月15日：南昌を出発。

1月16日：長沙に到着。

1月18日：王延春、胡繼宗、華国鋒らと談話、王延春から湖南省での社会主義教育運動の進捗状況について報告を受ける。

1月19日に長沙を出発し、1月20日に武漢に到着、王任重と談話。

1月27日：王任重、孫平化と談話。

1月29日：王任重と五反（汚職・窃盗，投機，浪費，分散主義，官僚主義の摘発）問題について談話し，その後，武漢を出発。

2月1日：邯鄲で，林鉄⁵⁴⁾，劉子厚，万曉塘⁵⁵⁾らから業務報告を受ける。

2月2日：北京に到着。

(6) 1963年4月7日—6月15日⁵⁶⁾

①期間中の主な滞在地

- ・上海：4月13日—15日，23日—26日，5月3日—6日
- ・杭州：4月15日—23日，26日—5月3日，5月6日—26日
- ・武漢：5月27日—6月12日

②主な旅程

4月7日：北京を出発。

4月8日：天津に到着し，林鉄，劉子厚，閻達開⁵⁷⁾，万曉塘から都市の五反，農村の社会主義教育運動それぞれの進捗状況について報告を受ける。

4月9日：済南に到着し，白如冰，楊得志⁵⁸⁾，袁昇平⁵⁹⁾，楊岩⁶⁰⁾から業務報告を受ける。

4月11日：南京に到着し，江蘇省委から同省での社会主義教育運動の進捗状況について報告を受ける。

4月13日：上海に到着。

4月15日：杭州に到着。

4月23日：上海に到着。

4月26日：杭州に到着。

5月1日：全ての中共中央地方局第一書記に対し杭州に来て，農村工作についての文書（前十条）を起草するための検討に参加するよう要請。

5月3日：上海に到着。

5月6日：杭州に到着。

5月7日—11日：杭州で彭真，中共中央地方局第一書記，陳伯達，江華，胡耀邦⁶¹⁾が参加して，前十条の草案について討議，周恩来と鄧小平も部分的に参加。

5月12日：毛沢東は昨晚一睡もできず、早朝に中共中央地方局第一書記を呼び出して、焦らずにじっくりと社会主義教育運動に取り組むようにと再度指示。

5月27日：武漢に到着し、王任重と階級闘争、市場問題について談話⁶²⁾。

5月31日と6月3日：王任重とソ連への返信について談話。

6月12日：武漢を出発。

6月14日：邯鄲で、林鉄、万曉塘らから業務報告を受ける⁶³⁾。

6月15日：北京に到着。

(7) 1963年10月10日—11月12日⁶⁴⁾

①期間中の主な滞在地

・武漢：10月13日—19日

・長沙：10月20日—26日

・南昌：10月26日—28日

・杭州：10月29日—11月1日、11月3日—9日

・上海：11月1日—3日、11月9日—11日

②主な旅程

10月10日：北京を出発、邯鄲に到達。

10月11日：林鉄、劉子厚、李悦農⁶⁵⁾ら河北省委の指導者らから業務報告を受ける。

10月12日：鄭州に到着。

10月13日：武漢に到着。

10月14日：王任重と談話⁶⁶⁾。

10月20日：長沙に到着、王任重も同行。

長沙滞在中に、社会主義教育運動の進め方についての意見を聴取、華国鋒や李瑞山などから湖南省の状況や農村工作について報告を受ける。

10月23日と25日：王任重と前十条草案の修正について談話。

10月26日：湖南省委第2期第8回全体会議および同省の三級合同会議の主要な内容などを聴取。王任重と談話した際に、社会主義教育運動を幅広く宣伝しなければならないと指摘。その後、長沙を出発し南昌に到着。

10月26日—28日：南昌を視察し、前十条について意見を聴取。

10月29日：杭州に到着。

11月1日：上海に到着。

11月3日：上海から杭州に到着。杭州滞在中に、劉少奇、鄧小平、柯慶施、羅瑞卿、謝富治⁶⁷⁾、田家英⁶⁸⁾、華東地区各省市第一書記と会議を開き、前十条の修正について討議⁶⁹⁾。

11月9日に上海に到着し、11日に上海を出発。

11月12日：天津に到着し、河北省委の指導者から業務報告を受ける。その後、北京に到着。

(8) 1964年3月27日—5月13日⁷⁰⁾

①期間中の主な滞在地

- ・武漢：4月2日—10日
- ・長沙：4月11日—18日
- ・南昌：4月19日—22日
- ・杭州：4月23日—5月2日
- ・上海：5月2日—9日

②主な旅程

3月27日：北京を出発。

3月28日—29日：邯鄲で、林鉄および劉子厚のほか、保定、石家荘、邯鄲などの地区委の指導者および山西省委指導者の陶魯筋⁷¹⁾、陰發祥⁷²⁾らから、農村における社会主義教育運動の状況について報告を受ける。

3月29日：邯鄲を出発し鄭州に向かう。

3月30日—4月1日：鄭州で、中共中央西北局の劉瀾濤⁷³⁾、李啓明⁷⁴⁾、安徽省委の李葆華⁷⁵⁾、河南省委の劉建勳、河南省内の地区委の一部指導者から、社会主義教育運動と五反の進捗状況について報告を受ける。

4月2日：武漢に到着し、王任重と談話。

4月5日：湖北省荊州地区委第一書記の王玉珍、同省黄崗地区委第一書記の姜一と農村工作について談話、王任重が同席。

4月10日に武漢を出発、4月11日に長沙に到着、王任重が同行。

4月18日に長沙を出発、4月19日に南昌に到着。

4月21日：楊尚奎，方志純⁷⁶⁾，劉俊秀，白棟材⁷⁷⁾，黃知真⁷⁸⁾らと談話。

4月22日に南昌を出発、4月23日に杭州に到着。

4月28日：江華，霍士廉⁷⁹⁾，林乎加，謝富治らと談話。

5月2日：杭州を出発し上海に到着。

5月9日：上海を出発。

5月10日—13日：専用列車が南京，蚌埠，濟南，天津で停車中に，国家計画委員会指導小組の李富春，李先念，譚震林，薄一波，陳伯達らから第三次五年計画の初歩的構想について報告を受ける。

5月13日：北京に到着。

(9) 1964年9月1日—9月21日⁸⁰⁾

①期間中の主な滞在地

- ・武漢：9月3日—6日
- ・杭州：9月9日—15日
- ・上海：9月15日—18日

②主な旅程

9月1日：北京を出発。

9月3日：武漢に到着。

9月5日：王任重，張体学⁸¹⁾，趙辛初⁸²⁾らと談話。

9月6日：王任重と計画・經濟工作について談話。

9月7日：長沙に到着，張平化，李瑞山，華国鋒らから湖南省の状況について報告を受ける。その後，南昌に到着。

9月8日に南昌を出発，9月9日に杭州に到着。

9月11日，12日，14日：国家計画委員会指導小組のメンバーから報告を聴取。

9月15日：上海に到着。

9月18日：上海を出発。

9月19日：蚌埠に到着。

9 月 20 日：済南に到着。

9 月 21 日：北京に到着。

(10) 1965 年 3 月 14 日—6 月 22 日⁸³⁾

①期間中の主な滞在地

・武漢：3 月 16 日—4 月 29 日

・長沙：4 月 30 日—5 月 21 日，5 月 25 日—30 日

・井岡山：5 月 22 日—24 日

・杭州：6 月 1 日—16 日

・上海：6 月 16 日—20 日

②主な旅程

3 月 14 日：北京を出発。

3 月 16 日：武漢に到着。

4 月 21 日：武漢で開催中の中共中央中南局委員会第 9 回全体会議の参加者に接見。

4 月 29 日：武漢を出発，長沙に向かう。

5 月 21 日：長沙を出発，張平化と汪東興⁸⁴⁾をともなって井岡山に向かう。

5 月 22 日：お昼に，江西省委書記処書記の劉俊秀および江西省副省長の王卓超の出迎えを受け，午後 4 時に井岡山に到着，そのあと山頂に向かう。

5 月 25 日：劉俊秀，王卓超，汪東興と談話。

6 月 1 日：杭州に到着。

6 月 11 日：中共中央華東局書記処メンバーの江華，葉飛⁸⁵⁾，劉培善⁸⁶⁾，賈久民⁸⁷⁾，伍洪祥⁸⁸⁾，方心純，唐亮⁸⁹⁾，譚啓龍，魏文伯⁹⁰⁾，陳丕顯⁹¹⁾，陳光⁹²⁾，李葆華らに接見。

6 月 16 日：杭州を出発，上海に到着。

6 月 20 日：上海を出発，南京に一時停車した際に，江渭清らから業務報告を受ける，そのあと蚌埠に到着。

6 月 22 日：北京に到着。

(11) 1965年11月12日—1966年7月18日⁹³⁾

①期間中の重要会議

- * 上海：中央政治局常務委員会拡大会議（1965年12月8日—15日）
- * 杭州：中央政治局常務委員会拡大会議（1966年3月17日—20日）
- * 杭州：中央政治局常務委員会拡大会議（1966年4月16日—24日）
- * 北京：中央政治局拡大会議（1966年5月4日—26日）

②期間中の主な滞在地

- ・ 上海：11月17日—19日，11月22日—26日，12月5日—15日，3月26日—4月1日，5月3日—15日
- ・ 杭州：11月19日—22日，11月26日—12月5日，12月15日—24日，2月27日—3月26日，4月1日—5月3日，5月15日—6月15日
- ・ 南昌：12月25日—1月5日
- ・ 武漢：1月5日—2月19日，6月28日—7月17日
- ・ 長沙：2月20日—26日
- ・ 韶山：6月17日—28日

③主な旅程

11月12日：北京を出発，天津に到着し，林鉄，劉子厚，万曉塘から，河北省の工業，農業，戦争準備の状況について報告を受ける。

11月13日：済南で，譚啓龍，楊得志，蘇毅然，劉秉琳⁹⁴⁾と談話，山東省の農業生産，第三次五カ年計画期の重点工作などについて聴取。

11月14日：徐州で，徐州市委副書記兼市長の呉明政，徐州地区委副書記の丁平と談話，徐州の工業農業生産，戦争準備などの状況について聴取。

11月15日：蚌埠で，李葆華，李任之⁹⁵⁾，王光宇⁹⁶⁾と談話。

11月16日：南京で，江渭清，陳光⁹⁷⁾と談話，江蘇省の工業農業生産，社会主義教育運動，小三線建設の状況について聴取。

11月17日：南京で，江蘇省委書記処書記兼南京市委第一書記の彭冲，南京市委書記処書記の劉中と談話，南京市の工業生産，戦争準備の状況について聴取。

同日：上海に到着し，陳丕顯，韓哲一⁹⁸⁾，曹荻秋⁹⁹⁾と談話，上海の工業農業生

産，戦争準備，小三線建設の状況について聴取。

11 月 19 日：上海を出発，杭州に到着。

11 月 22 日：杭州を出発，上海に到着。

11 月 26 日：上海を出発，杭州に到着。

12 月 5 日：杭州を出発，上海に到着。

12 月 8 日—15 日：中央政治局常務委員会拡大会議を開催して，羅瑞卿問題について討議¹⁰⁰⁾，葉剣英¹⁰¹⁾，楊成武¹⁰²⁾，劉伯承¹⁰³⁾，許世友，賀龍¹⁰⁴⁾ら軍指導者，鄧小平，李富春，薄一波¹⁰⁵⁾ら中央指導者，陳錫聯¹⁰⁶⁾，宋任窮¹⁰⁷⁾，李雪峰¹⁰⁸⁾，陶鑄，王任重，劉瀾濤ら中共中央地方局の指導者らが参加。

12 月 15 日：上海を出発，杭州に到着。

12 月 19 日：陳雲と談話，陳は 1962 年当時の情勢認識を自己批判。

12 月 22 日：彭真，康生¹⁰⁹⁾，楊成武と談話¹¹⁰⁾。

12 月 23 日：彭真と談話¹¹¹⁾。

12 月 24 日：杭州を出発，南昌に向かう。

1 月 5 日：楊尚奎，方志純，劉俊秀，白棟材，黃知真などと談話，羅瑞卿問題，農業生産などについて聴取。その後，南昌を出発，武漢に到着。

1 月 12 日：陶鑄，王任重，陳郁¹¹²⁾，張平化などから業務報告を受ける。

1 月 16 日：中共中央中南局書記処メンバーおよび中南地区各省の指導者と談話。

1 月 21 日：湖北省委が開催した春節パーティーにて，湖北省委，武漢市委，その他省内各市地委第一書記に接見。

2 月 3 日：王任重と談話。

2 月 14 日：陳伯達，王任重と談話。

2 月 19 日：武漢を出発，長沙に向かう。

2 月 23 日：張平化，王延春，李瑞山，華国鋒，蘇鋼¹¹³⁾などから業務報告を受ける。

2 月 26 日に長沙を出発，2 月 27 日に杭州に到着。

3 月 15 日：陳伯達および王任重と，農業機械化や物質的インセンティブの問題について談話。

3月17日—20日：中央政治局常務委員会拡大会議を開催，主として羅瑞卿問題を討議，劉少奇，周恩来，朱徳¹¹⁴⁾，林彪¹¹⁵⁾，彭真，陳伯達，康生，中共中央地方局第一書記，中央の関係部門の指導者が参加¹¹⁶⁾。

3月26日：杭州を出発，上海に到着。

3月28日と29日：康生と談話，北京市委および中央宣伝部を批判。

3月30日：康生，趙毅敏¹¹⁷⁾，魏文伯，張春橋¹¹⁸⁾，江青¹¹⁹⁾らと談話¹²⁰⁾。

4月1日：上海を出発，杭州に到着。

4月16日—24日：中央政治局常務委員会拡大会議を主宰し，彭真を批判，中共中央地方局第一書記も参加。

4月28日：陳伯達，康生と談話¹²¹⁾。

5月3日：杭州を出発，上海に到着。

5月4日—26日：北京で中央政治局拡大会議を開催（劉少奇が主宰，毛沢東は欠席）¹²²⁾。

5月15日：上海を出発，杭州に到着。

6月15日：杭州を出発，長沙に向かう。

6月16日：南昌で途中停車し，江西省委の指導者と談話¹²³⁾。その後，長沙に到着。

6月17日：韶山に到着。

6月24日：韶山ダムで遊泳。

6月26日：湖南省委および湘潭地委・県委の指導者と談話¹²⁴⁾。

6月28日：韶山を出発，長沙を経て，武漢に到着し，王任重から湖北省での文化大革命の状況について聴取。

7月11日と12日：周恩来，王任重と談話。

7月16日：長江を遊泳。

7月17日：武漢を出発，鄭州で停車時に，河南省委第一書記の劉建勲らから同省における文化大革命の状況について報告を受ける。

7月18日：北京に到着¹²⁵⁾。

毛沢東の地方視察に関するスケジュールを概観すると，毛は中央工作会議や

全国人民代表大会など重要会議が北京で開催される際に北京に戻り、それ以外では地方で時間を過ごすサイクルで北京と地方を行き来していたことが見て取れる。また時として、たとえ重要会議が北京で開催されようとも毛沢東は帰京せず、それらの会議を劉少奇に主宰させ、さらには杭州や廬山などの地方で重要会議を開催させることもあった。

地方への視察は原則として毛沢東自身の専用列車を利用して実施された。地方視察のコースには一定のパターンがあり、北京から時には天津を経由しつつ南に向かい、ほとんどの場合、武漢、上海、杭州に一定の期間滞在しており、それらが地方における毛沢東の拠点となっていた。時には長沙や南昌まで足を伸ばすことはあったものの、それより南の華南方面に向かうことはなかった。このことから、毛沢東は頻繁に地方視察に赴き、その期間もかなりの長きに渡ってはいたが、行き先は限定されており華北と華中をめぐるパターンが繰り返されていたことがわかる。少なくとも、本稿の考察対象期間中に東北、華南、西南、西北等の各地区には一切足を運んでいなかったのも特徴的であると言える¹²⁶⁾。

さて、毛沢東は地方視察の度に、武漢、上海、杭州にはほぼ毎回一定期間滞在していたため、必然的に当該地方の指導者と接触する機会も多かった。武漢滞在時には、湖北省委第一書記の王任重がほとんどの期間同行し、水泳好きな毛沢東が長江を遊泳した際も付き添っており、かなり親密な関係を築いていたことがうかがわれる。それと同時に、武漢を管轄下に置く中共中央中南局の第一書記である陶铸も、毛沢東が武漢滞在中にしばしば接触していた。王任重と陶铸は文化大革命発動と前後して、ともに中央の要職に抜擢され、とりわけ陶铸は党内序列第4位の中央政治局常務委員会委員兼中央宣伝部部長にまで取り立てられて、文化大革命最初期に毛沢東の右腕として尽力した¹²⁷⁾。

毛沢東は文化大革命発動前後に上海や杭州に滞在していたのはもとより、周知のように、上海を拠点にしていた江青や張春橋ら、のちに「四人組」と称される者たちは、毛の庇護のもと、文化大革命を急進的に推進した。また毛沢東は杭州滞在中にしばしば中央指導者たちを呼び寄せ、重要政策の検討を行うとともに、時には重要会議も開催した。武漢、上海、杭州のようにほぼ毎回一定

期間滞在することはなかったものの、北京とそれらの都市を往復する際に通る沿線にある河北省や江蘇省などの指導者たちとも、短時間ながらほとんど毎回接触した。それ以外にも、毛沢東の故郷である湖南省にもよく足を伸ばし同省の指導者ともしばしば接触していた。時には通常の地方視察コースを離れ、革命根拠地の井岡山や生まれ故郷の韶山などを訪れることもあったが、あえて革命根拠地である井岡山や生まれ故郷の韶山に足を運ぶことで、文化大革命発動への決意を示していたと考えられる。

2. 他の中央指導者への信任

前述したように、多くの時間を地方で過ごし、最高指導者でありながら北京で開催された重要会議でさえ時として欠席した毛沢東特有の統治スタイルの背景には何があったのであろうか。以下では、まず当時の中国共産党の中央指導部を構成する人員を概観し、つぎに自身は地方で多くの時間を過ごす一方で、政治の実務を取り仕切らせた他の中央指導者たちに対して毛沢東が抱いていた認識を検証したい。

(1) 中央指導部構成員

まずは次頁の図表にて、1956年9月に開催された中国共産党第8回全国代表大会のあとに成立した中国共産党指導部を構成していた指導者たちを概観しておこう。

最高指導部を構成していたのは、中央委員会主席の毛沢東以下、副主席および中央政治局常務委員会委員の面々である。なお次頁の図表で示したように、同指導部は、前述の中国共産党第8回全国代表大会のあとに成立してから、1958年5月に開催された中国共産党第8期中央委員会第5回全体会議（以下、8期5中全会と略称）および1962年9月に開かれた同中央委員会第10回全体会議（以下、8期10中全会と略称）において、補充人事が行われた。これらの補充人事において特に注目されるのは、1958年5月の8期5中全会において、副主席と中央政治局常務委員会委員に林彪が、中央政治局委員に柯慶施と李井泉¹²⁸⁾が抜擢されたことである。これらの補充人事には、林彪は軍における毛

図表 中国共産党指導部構成員

中央委員会主席
毛沢東
中央委員会副主席
劉少奇, 周恩来, 朱徳, 陳雲
(1958 年 5 月に増補) 林彪
中央委員会総書記
鄧小平
中央政治局常務委員会委員
毛沢東, 劉少奇, 周恩来, 朱徳, 陳雲, 鄧小平
(1958 年 5 月に増補) 林彪
中央政治局委員
毛沢東, 劉少奇, 周恩来, 朱徳, 陳雲, 鄧小平, 林彪, 林伯渠 (1963 年 12 月まで), 董必武, 彭真, 羅榮桓, 陳毅, 李富春, 彭徳懷, 劉伯承, 賀龍, 李先念
(1958 年 5 月に増補) 柯慶施 (1965 年 4 月まで), 李井泉, 譚震林
中央政治局候補委員
烏蘭夫, 張聞天, 陸定一, 陳伯達, 康生, 薄一波
中央書記処書記
鄧小平, 彭真, 王稼祥, 譚震林, 譚政 (1962 年 9 月まで), 黄克誠 (1962 年 9 月まで), 李雪峰
(1958 年 5 月に増補) 李富春, 李先念
(1962 年 9 月に増補) 陸定一, 康生, 羅瑞卿
中央書記処候補書記
劉瀾濤, 楊尚昆, 胡喬木

出典：中共中央組織部・中共中央党史研究室・中央档案馆『中国共産党組織史資料』第五卷（過渡時期和社会主义建設時期 1949.10-1966.5，北京：中共党史出版社，2000 年，40—42 頁）および上海辭書出版社・北京外文出版社編『中国人名大辞典・当代人物卷』（上海：上海辭書出版社，1992 年，2208 頁）に基づき，筆者作成。

沢東の代理人として，柯慶施と李井泉は大躍進政策の推進役として，毛が期待していたことが大きく影響したものと考えられる。

(2) 他の中央指導者に対する毛沢東の認識

毛沢東は1950年代初頭から、中央指導部を第一線と第二線に分け、政治の実務を担う第一線は劉少奇や周恩来らに任せ、毛自身は第二線に退く構想を表明していた¹²⁹⁾。そのため、かねてより毛沢東に次ぐ党内序列第2位の劉少奇が中共中央の実務を取り仕切り、毛の北京不在中は、劉が重要会議を主宰していた。こうした状況は、1959年に毛沢東が国家主席を退き劉少奇が引き継いで以降、より鮮明となっていった。

1961年9月22日に武漢で、前出のイギリス陸軍元帥モンゴメリーと談話した際、毛沢東は中央委員会副主席のうち、劉少奇が筆頭で実質的に第一副主席であり、彼は第一線を主宰していると証言している¹³⁰⁾。1965年8月5日に劉少奇、周恩来、鄧小平、彭真、陳毅¹³¹⁾、康生ら同席のもと、インドネシア共産党代表团と会見した際に毛沢東は、現在、70%から80%の仕事は、劉少奇、周恩来、鄧小平らが行っていて、毛自身はもう何年も中央政治局の会議には参加しておらず、それらの会議は劉少奇が主宰しており、副主席の劉少奇をはじめ、総書記の鄧小平、國務院総理の周恩来たちによる仕事ぶりは自分よりも優秀だと称賛していた¹³²⁾。

毛沢東による以上の証言からは、毛が劉少奇、周恩来、鄧小平ら他の中央指導者たちの能力を高く評価し、彼らを信任してほとんどの実務を任せていた実態がうかがわれる。他の中央指導者たちに対する毛沢東の信任の高さは、1962年1月に開催された拡大中央工作会議における講話の中でも表明されている。同会議において毛沢東は、経済建設にかかわる多くの問題について、自分はまだよくわかっていない。とりわけ工業や商業については、あまりよくわかっていない。「別の人の方がわかっている。劉少奇同志は自分よりわかっている。周恩来同志も自分よりわかっている。同様に鄧小平同志も自分よりわかっている。とりわけ陳雲¹³³⁾同志は自分よりもかなりよくわかっている」¹³⁴⁾。自分は農業については少しわかっているが、多少わかっているだけで、それほどでもない。そのため、自分は制度設計やイデオロギー¹³⁵⁾の問題に重点を置いて取り組んでおり、経済の実務に関する知識は乏しいと告白した¹³⁶⁾。そのほか1966年5月5日に上海でアルバニア代表团と会見した際に毛沢東は、鄧小平

について彼は軍事に長けている。体は小さいが、彼は南京攻略時の大将だった。それから浙江、江蘇、江西、福建を攻めたあと、彼らが率いる第二野戦軍は西に向かい四川、雲南、貴州の合計一億人規模の地方を占領したのだと述べ、毛沢東は鄧小平の軍事的手腕についても高く評価していた¹³⁷⁾。

劉少奇、周恩来、鄧小平ら他の中央指導者たちに対するこうした信任を背景として、1961年当時68歳になっていた毛沢東は、彼らに実務を取り仕切らせるにとどまらず、彼らを自らの後継者として後事を託す心づもりも抱いていたことがうかがわれる。例えば、1961年9月22日に武漢で、前出のイギリス陸軍元帥モンゴメリーと談話した際に毛沢東は、劉少奇が1959年に国家主席になったことで、以前は党主席も国家主席も毛だったが、今では党主席は毛で、国家主席は劉だ、もう少し経ったら、両方とも劉になる。たとえまだ死ななくとも、毛自身はいずれ名誉主席になる。すなわち、後継者は劉少奇であるということだと述べた¹³⁸⁾。引き続き9月24日にも武漢で毛沢東は、同じくモンゴメリーに対し、後継者が劉少奇であるのは明白だ、彼は第一副主席である。自分が死んだら劉ということだと述べた。それを受けてモンゴメリーから劉少奇のあとは周恩来かと問われて毛沢東は、劉のあとのことは関知しないと応じた¹³⁹⁾。こうして劉少奇ら他の中央指導者たちを信任し後事を託す心づもりを抱いていた毛沢東は、1963年10月23日と25日に王任重¹⁴⁰⁾と前十条草案の修正について談話した際、おもむろに自らは党主席や領袖を辞めるつもりであると打ち明け、さらには終身制など必要ないとも告げていた¹⁴¹⁾。

以上のことから、少なくとも1963年の時点で毛沢東は、後継者を劉少奇と定め、劉をはじめとする他の中央指導者たちに後事を託す心づもりを固めていたと考えられる。

3. 中央・地方関係への認識

毛沢東肝煎りで断行された大躍進政策が挫折し、劉少奇や鄧小平らの主導で経済調整政策が導入された当初、毛沢東は中央・地方関係について、どのような認識を抱いていたのであろうか。

大躍進期には毛沢東主導で急進的かつ大規模な地方分権が断行され、イギリ

スに追いつき追い越すとのスローガンのもとで、野心的な鉄鋼生産目標が掲げられたものの、周知のように、それらの施策は失敗に終わった。その結果を受けて毛沢東は、1961年8月27日、廬山で開催された中央工作会議にて、これまでの工業政策の主たる問題として、生産目標が高すぎたうえに、権限が地方に分散しすぎていたとの認識を示した¹⁴²⁾。同年9月24日には武漢で、前出のモンゴメリーから中央・地方関係の現状について、中央のコントロールは強化されたのか、あるいは依然として地方分権を維持しているのかと問われ、それに対して毛沢東は、もともと中央のコントロールが強すぎたため、そのあと地方分権を試みたものの、コントロールをゆるめすぎてまとまりがなくなり収拾がつかなくなってしまうと認め、とりわけ1958年から1961年前半にかけてはゆるめすぎてしまったと反省の弁を述べた。こうして毛沢東は大躍進期に断行された急進的かつ大規模な地方分権の失敗を反省するとともに、経済建設に関する自分たちの経験が足りなかったことを率直に認め、そこから教訓を得て、今では地方に対するコントロールをきつくもなくゆるくもなくやっていると言った¹⁴³⁾。

大躍進期の地方分権に対するこうした反省に基づき毛沢東は、1961年12月14日に無錫で、許世友も同席のもと、江渭清から江蘇省に関する状況報告を受けた際に、工業は質が重要で、これからは質を高めないといけない、工業生産体制は集中統一に改めなければならないといったように、地方指導者に対しても再集権の必要性を指摘していた¹⁴⁴⁾。同年12月20日には周恩来が中央への集中統一が必要だと語った際に毛沢東は、当初は地方分権を支持していたが、のちにその誤りに気づき、今では中央への集中統一を支持するようになった、このように誤りを正したことで、現在は良い方向に向かっているとの認識を示した¹⁴⁵⁾。1962年1月に開催された前出の拡大中央工作会議における講話の中でも毛沢東は同じく、分散主義に反対しなければならないと強調した¹⁴⁶⁾。

以上のように、毛沢東は大躍進期の急進的かつ大規模な地方分権に対する反省を踏まえて、少なくとも上記の拡大中央工作会議の頃までは、中央へ権限を集中させる必要性を指摘していた。毛沢東が大躍進期から一転して中央への権限集中の必要性を主張するようになった背景には、他の中央指導者たちに対す

る前述したような信任があったものと考えられよう。

第2節 地方からの文化大革命発動

第1節で確認したように、劉少奇や周恩來ら他の中央指導者たちへの信任のもと、毛沢東は多くの時間を地方で過ごし、1962年初頭に開催された拡大中央工作會議（七千會議）の頃までは、大躍進政策失敗の教訓を踏まえ、中央の権限強化に賛同していた。ところが、よく知られているように、同年9月に開催された8期10中全会で、社会主義社会における階級闘争の問題を提起して以降、毛沢東は次第に他の中央指導者たちへの不信任感を強め、ついには文化大革命を発動するに至った。そこで本節では、毛沢東が抱いた危機感、他の中央指導者たちへの不信任感、文化大革命発動と中央・地方関係のかかわりについて検証していきたい。

1. 危機感の源泉

毛沢東を文化大革命発動へと突き動かした背景にはいかなる危機感があったのであろうか。以下では、この問題を社会主義社会における階級闘争の深刻化や修正主義の出現に対する毛沢東の懸念を中心に考察したい。

周知のように、1962年9月に開催された前出の8期10中全会において毛沢東は、社会主義社会における階級闘争の問題を提起した¹⁴⁷⁾。その後、経済調整政策や社会主義教育運動の進め方をめぐって、毛沢東と他の中央指導者たちの間に亀裂が生じていったことはよく知られている¹⁴⁸⁾。また1960年代に入ってからの中ソ論争激化の影響も受けて、毛沢東は中国における修正主義の出現に対しても警戒を強めていった。とりわけ1964年以降、社会主義社会における階級闘争や修正主義の出現に対する毛沢東の危機感は強まった。以下では、その経緯を時系列で概観してみよう。

1964年

6月8日：北京で中央政治局常務委員会拡大会議を主宰した際に毛沢東は、わ

が国の三分の一の権力はわれわれの手の中になく、敵の手の中にあると指摘した¹⁴⁹⁾。

6月10日：毛沢東は中国でも10年後、20年後には必ずや修正主義が現れるとの認識を示した¹⁵⁰⁾。

11月中旬：近年、農村での階級闘争は深刻な事態に陥っており、多くの農村で指導権はわれわれの手の中になく、貧富の格差と階級分化が極度に進んでおり、基層幹部が新たな富裕農民階級の代表となってしまっているとの、11月13日付広東省委からの報告を毛沢東は称賛し、他の中央指導者たちに一読をすすめて注意を喚起した¹⁵¹⁾。

12月1日：陶铸は毛沢東と党中央に対し、広東省での調査の結果、ここ数年、農村での階級闘争は深刻な事態に陥っており、基層組織の指導権を奪われている、階級分化が進んでおり、新富裕農民階級は結託して貧農や中農らを搾取していると報告した。毛沢東の提案により、その報告内容はまもなく開催される中央工作会议で配布されることになった¹⁵²⁾。

12月22日：陳伯達、陶铸、王任重、張平化と談話した際に毛沢東は、中国において社会主義と資本主義の矛盾が深刻化しているとの認識を示し、それは広範な人民大衆と資本主義勢力を代表する実権派との矛盾に表れていると発言した¹⁵³⁾。

12月28日：中央工作会议にて毛沢東は、社会主義と資本主義の矛盾こそが主要矛盾であり、重要なことは、党内に資本主義の道を歩む実権派がいることだと指摘した¹⁵⁴⁾。

1965年

8月3日：フランス大統領特使と会談した際に毛沢東は、中国には修正主義者が広範に存在している、人数はそう多くはないが、一定の影響力はあるとの見解を示した¹⁵⁵⁾。

以上のように1964年以降、毛沢東は社会主義社会における階級闘争や修正主義の出現に対してますます危機感を強めていったわけであるが、そのような危機感は1966年に入るとさらに先鋭化した。例えば、1966年2月23日に長

沙で、張平化、王延春、李瑞山、華国鋒などから業務報告を受け、農村での戸別請負制に話が及んだ際に毛沢東は、1962年からその問題点を提起しているが、いまだに解決されていない、現在、多くの者たちが資本主義の道を歩もうとしているとの危機感を露わにした¹⁵⁶⁾。同年3月30日に康生、趙毅敏、魏文伯、張春橋、江青らと談話した際には、8期10中全会以降、全国で階級闘争が行われているのに、なぜ学术界や文芸界では階級闘争を展開しないのかと不満を述べ¹⁵⁷⁾、後述するように、こうした不満が文化大革命発動への導火線となったのであった¹⁵⁸⁾。

このように、毛沢東は社会主義社会における階級闘争や修正主義の出現に危機感を強めると同時に、復活した資本主義勢力やフルシチョフのような修正主義者によって、自らの地位や歴史的評価が脅かされ、中国共産党政権自体も崩壊に追い込まれてしまうのではないかと将来不安を募らせていた。そうしたことから、この時期に毛沢東は革命事業の継承者育成の重要性を強調するようになっていった。例えば、1964年6月8日に北京で中央政治局常務委員会拡大会議を主宰した際に毛沢東は、革命事業の継承者育成に関する宋任窮の報告は注目に値すると述べ、その重要性について他の中央指導者たちに注意を喚起した¹⁵⁹⁾。同月16日に中央政治局常務委員と中共中央地方局第一書記の合同会議を主宰した際にも、各大区¹⁶⁰⁾や各省市自治区が戦争に備えて計画を立案し、民兵工作や軍需工場建設も主導しなければならないと強調するとともに、修正主義の出現を防止するために、革命事業の継承者育成が急務だと強調した¹⁶¹⁾。

1966年3月30日には康生、趙毅敏、魏文伯、張春橋、江青らと談話した際に毛沢東は、次の世代が修正主義に対抗できるだろうか、文化大革命は長期にわたる任務で、われわれの世代で終わるものではない、徹底的にやりとげなければならないと文化大革命発動を見据えた発言をしていた¹⁶²⁾。文化大革命発動後もしばらくは北京に戻らず地方滞在を続けていた毛沢東は、同年6月16日に専用列車で南昌に停車し、江西省委の指導者と談話した際に、この度の政治運動すなわち文化大革命は、反修正主義、修正主義防止のための演習だ、われわれの若者は、革命戦争の苦難を味わっておらず、政治経験も乏しいので、彼らに荒波にもまれ、風雪に耐え、世の中の理を見聞させ、鍛錬する機会を与え

て、プロレタリア革命事業のしっかりとした継承者にしなければならない、この度の政治運動を通じて若者たちを鍛えてやりたいのだと述べ、文化大革命発動の狙いの一つが革命事業の継承者育成であることを明かした¹⁶³⁾。

この時期に毛沢東が中国共産党政権の行く末に不安を覚え、革命事業の継承者育成の重要性を強調するようになったのは、他の中央指導者たちに対する不信感の表れであったと同時に、当時、各国で起こっていた政変に自らの将来を重ね合わせた結果でもあったと考えられる。例えば、1965年11月24日に上海で、毛沢東はアメリカでの公民権運動やインドネシアでの政変¹⁶⁴⁾に言及して危機感を露わにするとともに、政策や路線が正しければ、大衆はわれわれを擁護してくれるはずだと述べ、暗に他の中央指導者たちに対する懸念を表明していた¹⁶⁵⁾。当然のことながら、1964年にフルシチョフが失脚したことも、修正主義者の代表格と目する人物が表舞台から消えたことで安堵する一方、社会主義政権における最高指導者の失脚を自らの行く末と重ね合わせ危機感を抱いていたものと考えられる。

2. 他の中央指導者に対する不信感と地方指導者への期待

前述したように、毛沢東が社会主義社会における階級闘争や修正主義の出現に危機感を強めるとともに、革命事業の継承者育成の重要性を強調するようになったのは、他の中央指導者たちに対する不信感の表れでもあったと考えられる。それではこの時期に毛沢東は他の中央指導者たちへの不信感をどのように募らせていったのであろうか。以下では、毛沢東の中央官僚機構や他の中央指導者たちに対する不信感の高まりを検証するとともに、それとは対照的に地方指導者たちに対して毛が抱いた期待を考察したい。

(1) 中央官僚機構への批判

毛沢東は1964年3月28日から29日にかけて邯鄲で、林銑および劉子厚のほか、保定、石家荘、邯鄲などの地区委の指導者および山西省委指導者の陶魯筋、陰發祥らと談話した際に、中央各部門のトップや局長たちが報告作成を秘書任せにしていたり、自ら現場に足を運ぼうとしない官僚主義的作風が横行し

ていることを問題視し、このように自らの地位に胡坐をかき、現実に即した働きのできない者たちは解任すべきであると批判した¹⁶⁶⁾。

その後、毛沢東は中央官僚機構の象徴でもある国家計画委員会¹⁶⁷⁾への批判を強めていった。例えば、1964年8月30日に北京で、中共中央地方局第一書記会議に参加している李井泉、陶铸、李雪峰、劉瀾濤、宋任窮、王任重、譚啓龍らと談話した際に毛沢東は、北京の情報が自らに入っていないと不満を表明し、それでも外交部はまだましで、宣伝部と人民解放軍もまずまずだが、その点で国家計画委員会と国家経済委員会は全く報告をしてこないと非難した¹⁶⁸⁾。同様に、1965年2月21日に周恩来が中央書記処での検討を経て、国家建設委員会を再設置することになったと報告した際、毛沢東は国家建設委員会と国家経済委員会の設立はもともと毛自身が主張していたことであり、そもそも国家建設委員会が廃止されていたこと自体、自分は全く知らされておらず、関連する報告が全く行われていないと述べ不満を露わにした¹⁶⁹⁾。

さらには国家計画委員会の指導者たちに対しても毛沢東は批判を強めた。1964年11月26日に李富春と薄一波が西南地区の三線建設¹⁷⁰⁾について報告した際に毛沢東は、もっと早く計画を進められないのか、帝国主義諸国からの脅威が差し迫っているのだぞと批判し建設のペースを上げるよう厳命した¹⁷¹⁾。翌月12日には、同月7日付の長期計画編成に関する報告について、李富春に内容が薄いと指摘し、数か月以内にもっと中身のあるものを再提出するようにと指示した¹⁷²⁾。

これらの批判の背景には、党内に蔓延る官僚主義への懸念があった。例えば、1964年12月に開催された中央工作会議において毛沢東は、社会主義と資本主義の矛盾こそが主要矛盾であり、重要なことは、党内に資本主義の道を歩む実権派がいることだと指摘するとともに、党内の官僚主義者を批判した¹⁷³⁾。

こうして中央官僚機構に対して不満を強めた毛沢東は、1964年9月11日、12日、14日に杭州で国家計画委員会指導小組のメンバーから報告を受けた際に、今後、同委員会は計画策定だけを担い、生産や基本建設の問題には口出しするなと厳命した¹⁷⁴⁾。翌1965年に入ると、国家計画委員会の権限縮小や改組が断行された。例えば同年1月に、毛沢東の意向に基づき小計委が設立され

た。それは、周恩来が直接指導する工作機構であり、主な任務は経済発展戦略を検討することとされた。その後、小計委は第三次五カ年計画の方針や任務を構想することに着手し、余秋里、陳伯達らがメンバーに加わり、正式に国家計画委員会の業務を取り仕切る体制に移行したことで、それ以降、小計委の名称は使われなくなった¹⁷⁵⁾。

(2) 他の中央指導者に対する不信感

1964年末を迎える頃になると、劉少奇ら他の中央指導者たちに対する毛沢東の不信感はさらに高まっていった。同年12月26日には自身の誕生日祝いの席で毛沢東は、参列した中央指導者、各大区の主要な指導者、中央各部門の一部の指導者、労働模範、科学者、身辺スタッフを前にした講話の中で、中央の一部の機関は独立王国になっていると批判するとともに、党内に修正主義が起る危険性についても言及した¹⁷⁶⁾。翌27日には中央工作会議にて毛沢東は同様に、党内には少なくとも社会主義派と資本主義派がある、すなわち中央には二つの独立王国があるとの認識を示した¹⁷⁷⁾。

毛沢東が中央の一部は独立王国になっていると批判したり、党内における修正主義出現の危険性に言及した背景には、これまで信任して実務を取り仕切らせてきた劉少奇ら他の中央指導者たちに対する不信感があったものと考えられる。1965年に入ると、そのことを象徴するように、1月23日に中央政治局常務委員会拡大会議の開催に先立ち、毛沢東は新たに国家計画委員会の指導者に据えた余秋里¹⁷⁸⁾と谷牧¹⁷⁹⁾に対して、これから国家のことは君たちに任せる、大事は君たちに頼ることとする、われわれは参謀と顧問の役割を務めるだけで、実務は君たちに任せることにする、君たちは少将ではなく中将だ、やはり若い人に任せるのがよいと語っていた¹⁸⁰⁾。これは明らかに、それまで信任してきた他の中央指導者たちに対する不信任の表れであり、のちの文化大革命発動を予感させるものであった。

(3) 地方指導者への期待

こうして毛沢東は他の中央指導者たちへの不信感を深める一方で、地方指導

者たちへの期待を高めていった。前述したように、毛沢東は国家計画委員会を批判するとともに、他の中央指導者たちに対する不信感を強め、中央の一部は独立王国になっているとの認識を示したのと時を同じくして、地方の役割の重要性を強調するようになっていった。

このような毛沢東の意向を反映し、1964年12月26日から27日にかけて国家計画委員会の指導者である李富春、薄一波、李先念、余秋里らは中共中央地方局と直轄市の指導者を招いて計画工作の改善について話し合った際に、これまでの計画工作について自己批判した。その後の討論を経て、第三次五カ年計画は当初の構想を破棄し、戦争準備と三線建設に重点を置くことに改変されることになった¹⁸¹⁾。それと同時に、経済・計画工作に関する中央と地方の役割分担は、原則として、中央は投資、設備、原材料の分配と計画案の審査のみを担当し、各計画の具体的な執行の仕方については中共中央地方局と省級部門が担当することとした¹⁸²⁾。

文化大革命発動を間近に控えた1966年3月になると、毛沢東による地方重視の姿勢はより明確になっていった。例えば、同年3月12日には農業機械化に関して劉少奇に対し、中央で全て統制したのでは身動きが取れず良くない、戦争準備のためにも、地方の自主性を尊重すべきだと指摘した¹⁸³⁾。同様に3月20日に杭州で中央政治局常務委員会拡大会議を主宰した際にも毛沢東は、中央と地方の経済関係に言及し、中央に全てを集中させたのでは、地方で拡大再生産ができない、中央が厳しく統制しては、生産力の発展の妨げになる、中央は大きな方針、政策、計画を司るだけにして、実務は地方に任せるべきだ、中央はコントロールし過ぎてはいけなくと強調した¹⁸⁴⁾。さらに農業や工業の分野でも、生産力を発展させるためには、適度な分権が必要であると指摘し¹⁸⁵⁾、地方重視の姿勢を鮮明に打ち出していた。

前述したように、1962年初頭に開催された拡大中央工作会议の頃までは、大躍進期に断行された急進的かつ大規模な地方分権による弊害の教訓を踏まえて、中央への権限集中の必要性を毛沢東は主張していたが、1964年以降になると明らかに地方への権限移管の重要性を説くようになっていた。中央・地方関係についてのこうした認識変化の背景には、前述したような中央官僚機構や

他の中央指導者たちに対する不信感があったものと考えられる。

3. 他の中央指導者への批判と文化大革命発動

その後、毛沢東は他の中央指導者たちへの批判を強める一方で、地方指導者たちに中央に対する造反を呼びかけるようになり、ついには地方から文化大革命を発動するに至った。以下では、その一連の過程を検証したい。

(1) 地方指導者たちへの造反呼びかけ

かねてより毛沢東は、地方指導者たちに自らが提唱する政策の推進役としての役割を期待していたが、その後、毛は彼らに他の中央指導者たちへの造反を呼びかけるに至った。

例えば、1964年8月30日に北京で、中共中央地方局第一書記会議に参加している李井泉、陶铸、李雪峰、劉瀾濤、宋任窮、王任重、譚啓龍らと談話した際に毛沢東は、劉少奇による社会主義教育運動の進め方に不満を述べ、階級闘争を徹底させないといけなく指摘するとともに¹⁸⁶⁾、国家計画委員会をはじめとする中央の機関が毛に報告を怠っているとして苦言を呈した¹⁸⁷⁾。こうした文脈の中で毛沢東は、「地方が中央を攻めることを希望する、地方で中央を孤立させるのが私のやり方だ」¹⁸⁸⁾と述べ、地方指導者たちに中央に対する造反を呼びかけた。引き続き9月1日にも中共中央地方局第一書記会議が開催され、毛沢東は地方指導者たちと中央・地方関係のあり方について討論を重ねた¹⁸⁹⁾。その後、地方視察に出発した毛沢東は9月7日に長沙に到着し、張平化、李瑞山、華國鋒から湖南省の状況について報告を受けた際に、中央では劉少奇が実務を取り仕切っているが、君たちはなぜ中央を批判しないのかと問いかけ¹⁹⁰⁾、彼らによる中央への造反に期待をかけた。

(2) 地方からの文化大革命発動

以上のように、北京で実務を取り仕切る他の中央指導者たちに対して不満を募らせ、中央に対する地方指導者たちによる造反に期待を寄せた毛沢東は、ついに地方からの文化大革命発動を決断するに至った。

1965 年 11 月 10 日に上海の『文匯報』にて、姚文元の「新編歴史劇『海瑞免官』を評す」が発表され、文化大革命の導火線となったことはよく知られている¹⁹¹⁾。当初、北京の各紙は「評新編歴史劇『海瑞免官』を評す」を転載しなかったため、上海滞在中であった毛沢東は、そのことに不満を示し、11 月 23 日、上海で冊子にして、全国に広めるようにと指示した¹⁹²⁾。

12 月 22 日には杭州にて、彭真、康生、楊成武と談話した際に毛沢東は、『海瑞免官』の免官が問題で、海瑞を彭德懷に見立てて、彭を解任した毛を暗に批判することを意図していると指摘した。この問題に関して北京市のトップを務めていた彭真は、調査の結果、作者の呉晗¹⁹³⁾と彭德懷¹⁹⁴⁾の間に組織的な関係はないと報告した¹⁹⁵⁾。翌 12 月 23 日に再び彭真と談話した際に毛沢東は、呉晗の問題は二か月後に政治的結論を下すと告げた¹⁹⁶⁾。

1966 年に入ると、上記の問題に関する毛沢東の批判はより激しいものになっていった。同年 3 月 28 日と 29 日に上海で康生と談話した際に毛沢東は、北京市委と中央宣伝部はなぜ悪人¹⁹⁷⁾をかばっているのだ、この両者は即刻解散すべきだ、悪人をかばうのはもうやめるべきであると彭真に伝えるよう、康に指示した¹⁹⁸⁾。翌 3 月 30 日にも上海にて康生、趙毅敏、魏文伯、張春橋、江青らと談話した際に毛沢東は、どうして呉晗はあのような反動的文章を書いたのか、彭真と中央宣伝部は上海市委宣伝部に圧力をかけるべきではない、1962 年の 8 期 10 中全会以降、全国で階級闘争を行ってきたにもかかわらず、なぜ学術界や文芸界では階級闘争を行わないのかと述べた¹⁹⁹⁾。

続けて毛沢東は、中央が間違いを犯したら、地方は中央を攻めるべきだ、1965 年 9 月の中央工作会議で述べたように、中央で修正主義が現れたら、地方は造反しなければならないと強調し²⁰⁰⁾、中央に対する地方の造反を呼びかけた。さらに毛沢東は、中央文化革命五人小組²⁰¹⁾、中央宣伝部、北京市委をもう支持しない²⁰²⁾、それらはみな解散しなければならないと語り²⁰³⁾、他の中央指導者たちに対する敵意を露わにしていた。4 月 28 日には杭州で陳伯達、康生と談話した際に毛沢東は、彭真を再度批判し、他の中央指導者たちに対する毛の批判を象徴する「北京は針一本通すことができない、水一滴通すこともできない」との有名な言葉とともに、とりわけ彭真に対しては自らの世界観で

党を改造しようとした、彭の誤りは徹底的に批判しなければならないと激しく非難した²⁰⁴⁾。

先述したように、毛沢東は中央官僚機構の象徴たる国家計画委員会を批判し、社会主義教育運動の進め方をめぐっては劉少奇との間に亀裂が広がっていた。また、上記のように『海瑞免官』をめぐって彭真に対する批判を強めた。毛沢東にとってこれらは個別の政策をめぐる問題を超えて、社会主義社会における階級闘争や修正主義の出現といった中国の将来や中国共産党政権の存亡にかかわる深刻な問題として捉えられていた。それゆえに文化大革命を発動し、これまで信任し実務を取り仕切らせていた他の中央指導者たちを排除することを毛沢東に決断させたのであった。

毛沢東を文化大革命発動へと突き動かしたこうした危機感は、上海滞在中の発言からも読み取ることができる。例えば、1966年3月28日と29日に上海で康生と談話した際に毛沢東は、次の世代が修正主義に対抗できるだろうか、文化革命は長期にわたる任務で、自分たちの世代で終わるものではない、徹底的にやりとげなければならないとの強い意志を示していた²⁰⁵⁾。同様に同年5月5日に上海でアルバニア代表团と会見した際に毛沢東は、いつか修正主義が北京を占領するだろう、今、自分を擁護している人間が態度を翻し、修正主義者に豹変するのだ、自分たちの世代がこの世を去れば、おそらく修正主義が起ころう、自分たちは死に際だが、もうひと踏ん張りして、資本主義復活の根源をなくしてしまわなければならないと述べ²⁰⁶⁾、毛は残りの人生をかけて文化大革命発動に踏み切る決意を示していた。

それと同時に、文化大革命発動に向けたこうした一連の動きが、全て毛沢東の上海および杭州に滞在中に行われていたことは注目に値する。すなわち、その間、毛沢東は北京におらず、地方から文化大革命発動へ向けた動きをしていたのであった。前節で確認したように、毛沢東は多くの時間を地方で過ごしていたが、その間とりわけ上海と杭州での滞在期間が長かったことから、この二つの都市が毛自身の拠点となっていたことは間違いない。ここまで本節で検証してきたように、他の中央指導者たちに対する批判を強め、地方指導者たちに中央への造反を呼びかけていた毛沢東が、拠点としていた上海や杭州から文化

大革命発動に向けた動きを進めていったのは自然な流れであったと言えよう²⁰⁷⁾。

通称「五・一六通知」²⁰⁸⁾が発出されたことで、文化大革命が開始とされる1966年5月16日当日はもとより、その後も上海や杭州をはじめとする地方各地に毛沢東は滞在し続け、毛が北京に戻ったのは同年7月に入ってからであった。こうしたことから文化大革命発動をめぐっては、北京で実務を取り仕切る劉少奇ら他の中央指導者たちと最高指導者でありながら多くの時間を地方で過ごす毛沢東との対立構図が浮かび上がってくる。

結 語

本稿では、現代中国の歴史に多大なる影響を及ぼした文化大革命の起源について、中央・地方関係の視点から分析を行った。具体的には、最高指導者でありながら多くの時間を地方で過ごす毛沢東特有の統治スタイルと文化大革命発動の関係を検証してきた。

本稿における考察を通じて得られた知見は、以下の通りである。まず第1節では、劉少奇をはじめとする他の中央指導者たちに対する信任が、多くの時間を地方視察に費やす毛沢東特有の統治スタイルの背景にあったことを明らかにした。つぎに第2節では、社会主義社会における階級闘争に危機感を強めるとともに修正主義の出現を懸念し、他の中央指導者たちに対して次第に不信感を募らせる一方で、地方指導者たちに期待を寄せた毛沢東が、地方から文化大革命を発動するに至った過程が明らかとなった。以上のことから、最高指導者でありながら多くの時間を地方で過ごす毛沢東と、北京で実務を取り仕切る他の中央指導者たちとの間の物理的距離が、文化大革命へと至る政治の動向に一定の影響を及ぼしていたと考えられる。換言すれば、最高指導者でありながら多くの時間を地方で過ごす毛沢東特有の統治スタイルに起因する物理的距離が他の中央指導者たちとの心理的距離を次第に醸成し、その結果、彼らに対する当初の信任から不信そして批判へと結び付き、文化大革命の発動へと至ったと結論付けられよう。

今後の研究課題としては、今回は言及できなかった毛沢東および他の中央指導者関連の資料も駆使して、本稿において展開された議論を裏付けるとともに、対外関係や安全保障からの視点も取り入れることで、本稿で行った考察をさらに拡充させていきたい。

- 1) 中央委員会副主席，中央政治局常務委員会委員，国家主席
- 2) Lowell Dittmer, *Liu Shao-chi and the Chinese Cultural Revolution: The Politics of Mass Criticism*, Berkeley: University of California Press, 1974.
- 3) 国分良成「社会主義教育運動とそれをめぐる党内論争——文化大革命前史・1962～1965——」，アジア政経学会『アジア研究』第27巻第3号，1980年10月，41-97頁。
- 4) Roderick MacFarquhar, *The Origins of the Cultural Revolution 3: The Coming of the Cataclysm 1961-1966*, New York: Columbia University Press, 1997.
- 5) 錢庠理『歴史的変局——從挽救危機到反修防修（1962-1965）』香港：中文大学出版社，2008年。
- 6) 朱建榮『毛沢東のベトナム戦争——中国外交の大転換と文化大革命の起源』東京大学出版会，2001年。
- 7) 以下の研究では、近年利用可能となった機密資料を駆使して得られた知見に基づき、文化大革命の起源について考察が行われており、啓発を受ける点が多々ある。高橋伸夫『構想なき革命——毛沢東と文化大革命の起源——』慶應義塾大学法学研究会，2025年。
- 8) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，北京：中央文献出版社，2013年，581頁。
- 9) 毛沢東に呼応して文化大革命を急進的に推進した江青，張春橋，姚文元，王洪文らは、のちに「四人組」と称された。なお「四人組」については、以下の研究を参照されたい。Lowell Dittmer, “Bases of Power in Chinese Politics: A Theory and an Analysis of the Fall of the ‘Gang of Four’”, *World Politics*, Vol. 31, No. 1 (Oct., 1978), pp. 26-60.
- 10) 以下の書籍でもこの点に着目し、毛沢東による一連の地方視察に関する紹介と考察が行われている。袁小榮編著『毛沢東離京巡視紀実 1949-1976』上・中・下巻，北京：人民出版社，2016年。
- 11) この時期に実施された経済調整政策とは、急進的かつ大規模な地方分権や現実離れた鉄鋼生産目標などを旨とする大躍進政策にともなう混乱を收拾するために、劉少奇や鄧小平らが中心となって推進した、中央への再集権や農業生産回復などを中心とする一連の施策を指す。経済調整政策の導入過程とその施策について

は、当事者として同政策に関与していた薄一波による以下の回顧録において詳述されている。薄一波『若干重大決策與事件的回顧』下巻，中共中央党校出版社，1993年，883-899頁，1047-1069頁。

- 12) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，28頁。
- 13) 同上，2-31頁。
- 14) 河北省委書記処書記（1964年3月から第二書記），河北省省長，1961年9月から中共中央華北局書記処書記
- 15) 中共中央華東局第二書記，安徽省委第一書記，安徽省軍区第一政治委員
- 16) 中共中央中南局第二書記（1966年8月から第一書記），湖北省委第一書記，武漢軍区政治委員
- 17) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，56-61頁。
- 18) 中共中央華東局書記処書記，国防部副部长，南京军区司令員
- 19) 中共中央華東局書記処書記，江蘇省委第一書記，南京军区第三政治委員兼江蘇省軍区政治委員
- 20) 中共中央華東局書記処書記，山東省委第一書記，山東省省長（1963年12月まで），済南军区政治委員
- 21) 山東省委書記処書記
- 22) 山東省委書記処書記，山東省副省长（1963年12月から省長）
- 23) 山東省委書記処書記，山東省副省长
- 24) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，85-95頁。
- 25) 政治局委員，中共中央華東局第一書記兼上海市委第一書記，上海市市長，南京军区第一政治委員
- 26) 中共中央華東局書記処書記，浙江省委第一書記，浙江省軍区第一政治委員，1962年9月から南京军区第五政治委員
- 27) 1965年2月まで浙江省委書記処書記，1964年12月から小計委委員
- 28) 浙江省委書記処書記，浙江省副省长
- 29) 中共中央華東局書記処書記，江西省委第一書記，江西省軍区政治委員，1962年9月から福州军区第三政治委員
- 30) 江西省委書記処書記，江西省省長
- 31) 中共中央中南局書記処書記，湖南省委第一書記，湖南省軍区第一政治委員，1966年3月から中央文革小組メンバー，1966年5月から中央宣伝部常務副部长
- 32) 湖南省委書記処常務書記（1965年5月から第二書記）
- 33) 湖南省委書記処書記
- 34) 湖南省委監察委員会書記，湖南省委党校校長
- 35) 湖南省委書記処書記，湖南省副省长

- 36) 湖南省委書記処書記
- 37) 湖南省委書記処書記，長沙市委第一書記
- 38) 中共中央中南局第一書記（1966年8月まで），広東省委第一書記（1965年2月まで），広州軍区第一政治委員。1965年1月から國務院副総理，1966年5月から中央書記処常務書記，中央宣伝部部長，同年8月から中央政治局常務委員会委員，中央文革小組顧問
- 39) 中共中央中南局書記処書記，河南省委第一書記，河南省軍区第一政治委員
- 40) 前掲，『毛沢東年譜（1949-1976）』，100-110頁。
- 41) 中央政治局委員（1966年8月から中央政治局常務委員会委員），中央書記処書記，國務院副総理兼国家計画委員会主任
- 42) 中央政治局候補委員（1966年8月から中央政治局常務委員会委員），中央宣伝部副部長，中央政治研究室主任，『紅旗』総編集長，中国科学院副院長，毛沢東秘書，1962年10月から国家計画委員会副主任，1966年5月から中央文革小組組長
- 43) 人民解放軍総参謀長，1962年9月から中央書記処書記を兼務
- 44) 湖南省委書記処書記，湖南省副省長
- 45) 中共中央中南局書記処書記，広州軍区司令員
- 46) 広州軍区第二政治委員
- 47) 武漢軍区司令員
- 48) 武漢軍区第二政治委員
- 49) 中央政治局委員，中央書記処書記，北京市委第一書記
- 50) 中央委員会委員，中央对外聯絡部副部長
- 51) 前掲，『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，174-187頁。
- 52) 河北省委書記処書記
- 53) 河北省副省長
- 54) 中共中央華北局第三書記，河北省委第一書記，河北省軍区政治委員
- 55) 天津市委第一書記
- 56) 前掲，『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，206-233頁。
- 57) 河北省委書記処書記
- 58) 済南軍区司令員
- 59) 済南軍区第二政治委員
- 60) 山東省委常務委員兼秘書長
- 61) 中央委員会委員，中国共産主義青年団中央書記処第一書記
- 62) そのほか，幹部が労働に参加する重要性を強調するとともに，省級機関の人員削減を提唱し，湖北省が模範となるようにと指示。
- 63) その際に，林鉄は農村工作や社会主義教育運動の状況について報告。

- 64) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，268-280頁。
- 65) 河北省委書記処書記
- 66) その際に毛沢東は、県レベルから五反を始め、社会主義教育運動につなげていくようにと指示。
- 67) 中央委員会委員，公安部部長
- 68) 中央辦公庁副主任
- 69) その際に毛沢東は、社会主義教育運動を広く宣伝すべきであると強調した。
- 70) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，331-350頁。
- 71) 中央委員会候補委員，中共中央華北局書記処書記，山西省委第一書記
- 72) 山西省委農村工作部副部長
- 73) 中央書記処候補書記，中央監察委員会副書記（1962年9月まで），中共中央西北局第一書記，蘭州軍区政治委員（1964年6月から第一政治委員）
- 74) 陝西省委書記処書記，陝西省省長
- 75) 安徽省委第一書記，安徽省軍区第一政治委員
- 76) 江西省委書記処書記，江西省副省長（1965年3月に省長代行，同年4月に省長）
- 77) 江西省委書記処書記
- 78) 江西省委書記処候補書記兼秘書長
- 79) 浙江省委書記処書記，浙江省副省長
- 80) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，404-409頁。
- 81) 湖北省委書記処常務書記（1965年3月から第二書記），湖北省省長
- 82) 湖北省委書記処書記，湖北省副省長
- 83) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，485-504頁。
- 84) 公安部副部長
- 85) 中共中央華東局書記処書記，福建省委第一書記，福州軍区政治委員
- 86) 福州軍区第二政治委員
- 87) 福建省委書記処書記
- 88) 福建省委書記処書記，福建省委党校校長
- 89) 南京軍区第二政治委員
- 90) 中共中央華東局秘書長，上海市委副書記
- 91) 中共中央華東局書記処書記，上海市委書記処書記（1965年11月から第一書記），上海警備区第一政治委員
- 92) 江蘇省委書記処書記
- 93) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，536-600頁。
- 94) 山東省委書記処書記

- 95) 安徽省委書記処書記, 安徽省副省長
- 96) 安徽省委書記処書記, 安徽省副省長
- 97) 江蘇省委書記処書記
- 98) 中共中央華東局書記処書記兼經濟委员会主任
- 99) 上海市委書記処書記, 上海市副市長 (1965 年 12 月から市長)
- 100) その結果, 人民解放軍総参謀長の羅瑞卿を解任し, 楊成武を同総参謀長代行とする と決定。
- 101) 中央軍事委員会常務委員, 軍事科学院院長
- 102) 人民解放軍第一副総参謀長兼中央軍事委員会辦公庁主任
- 103) 中央政治局委員, 国防委員会副主席
- 104) 中央政治局委員, 中央軍事委員会副主席
- 105) 中央政治局候補委員, 中央財政經濟小組副組長, 國務院副總理兼工業交通辦公 室主任, 国家經濟委員会主任, 1962 年 10 月から国家計画委員会副主任
- 106) 中共中央東北局書記処書記, 瀋陽軍区司令員
- 107) 中共中央東北局第一書記, 瀋陽軍区第一政治委員, 1966 年 8 月から中央政治 局候補委員
- 108) 中央書記処書記, 中共中央華北局第一書記, 北京軍区第一政治委員。1965 年 1 月から全国人民代表大会常務委員会副委員長, 1966 年 5 月から北京市委第一書記, 同年 8 月から中央政治局候補委員
- 109) 中央政治局候補委員, 中央書記処書記
- 110) その際に毛沢東は, 「海瑞免官」の免官が問題で, 彭德懷は海瑞だと指摘, 一 方で彭真は調査の結果, 吳晗と彭德懷の間に組織的な関係はないと報告。
- 111) 毛沢東は, 吳晗の問題は二か月後に政治的結論を下すと述べる。
- 112) 中共中央中南局第三書記, 広東省委書記処書記, 広東省省長
- 113) 湖南省委秘書長
- 114) 中央委員会副主席, 中央軍事委員会常務委員, 全国人民代表大会常務委員会委 員長
- 115) 中央委員会副主席, 中央政治局常務委員会委員, 国防部部長
- 116) 鄧小平は西北地区の三線建設視察のため欠席
- 117) 中央委員会候補委員, 中央聯絡部副部長, 國務院外事辦公室副主任
- 118) 上海市委書記処候補書記兼宣伝部部長
- 119) 毛沢東夫人, 1966 年 5 月から中央文革小組第一副組長
- 120) その際に毛沢東は, 彭真および中央宣伝部を批判するとともに, 中央が間違い を犯したら, 地方は中央を攻めるべきだ, 中央で修正主義が現れたら, 地方は造反 しなければならないと主張。また, 文化革命は長期にわたる任務で, 自分の世代で

終わるものではない、徹底的にやり遂げなければならないと強調した。

- 121) 再度、毛沢東は彭真を批判し、北京は針一本通すことができない、水一滴通すこともできない、彭真は自らの世界観で党を改造しようとした、彭の誤りは徹底的に批判しなければならないと指摘。
- 122) 同年 4 月に杭州で開催された中央政治局常務委員会拡大会議における毛沢東の提案に基づき、彭真、羅瑞卿、陸定一、楊尚昆の誤りを非難して、彼らの職務を停止・解任することを決定し、文化革命五人小組を廃止すると同時に、中央政治局常務委員会の下に文化革命小組（中央文革小組）をあらたに設立。その間、5 月 16 日に「中国共产党中央委员会通知」（五・一六通知）が発出され、文化大革命が公式に発動された。
- 123) その際に毛沢東は、この度の運動（文化大革命）は、反修正主義、修正主義防止のための演習だ、われわれの若者は、革命戦争の苦難を味わっておらず、政治経験も乏しいので、彼らに荒波にもまれ、風雨に耐えて、世の中の理を見聞させ、鍛錬の機会を与えることで、プロレタリア革命事業のしっかりとした継承者にしなければならない、この運動を通じて、彼らを鍛えてやりたいのだと述べた。
- 124) その際に毛沢東は、昔、君たちと長征に向かったが、今また君たちと長征（文化大革命のための闘い）に向かわなければならないと述べた。
- 125) 北京到着後、中央文革小組から報告を受けた際に、毛沢東は文化大革命の進展状況に不満を示した。
- 126) 下記の研究によれば、中国共産党の指導者による地方視察のコースが限定されている背景には、警備上の問題があるとされる。周俊『中国共産党の神経系——情報システムの起源・構造・機能——』名古屋大学出版会、2024 年、205-247 頁。
- 127) その後、前出の江青らと対立するとともに、毛沢東からの信任も失い失脚した。陶鑄失脚の経緯については、以下の研究を参照されたい。高文謙『晩年周恩来』香港：明鏡出版社、2003 年、168-171 頁。
- 128) 中央政治局委員、中共中央西南局第一書記、四川省委第一書記（1965 年 2 月まで）、成都軍区政治委員、1965 年 1 月から全国人民代表大会常務委員会副委員長、同年 3 月から中共中央西南局三線建設委员会主任
- 129) 薄一波『若干重大決策與事件的回顧』上巻、中共中央党校出版社、1991 年、310 頁。
- 130) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第 5 巻、28 頁。
- 131) 中央政治局委員、外交部部長
- 132) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第 5 巻、518 頁。
- 133) 中央委員会副主席、中央財政經濟小組組長、國務院副總理
- 134) なお、この部分は、講話原稿がのちに配布される際に削除された。

- 135) 資本主義経済と社会主義経済の関係、プロレタリア階級とブルジョワ階級の関係などを指す。
- 136) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，79頁。
- 137) 同上，584頁。なお以下の研究からも、鄧小平が毛沢東の部下として能力を発揮し、毛からの信任を勝ち得ていたことが裏付けられる。鐘延麟『文革前的鄧小平——毛沢東的「副師」（1956-1966）』香港：中文大学出版社，2013年。
- 138) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，23-24頁。
- 139) 同上，27頁。
- 140) 毛沢東の地方視察を概観した際に既述したように、毛はほぼ毎回武漢に一定期間滞在し、その間、多くの時間を王任重が同行しており、水泳好きの毛が長江を遊泳した際にも付き添って泳いでいた。こうした親密な間柄であっただけに、毛沢東は王任重に対して気を許し、思わず本心を打ち明けたのであろうと推察される。
- 141) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，271頁。
- 142) 同上，14頁。
- 143) 同上，28頁。
- 144) 同上，57-59頁。
- 145) 同上，61頁。
- 146) 同上，69頁。
- 147) 8期10中全会において毛沢東が社会主義社会における階級闘争の問題を提起した経緯については、同会議に参加した薄一波が当事者として下記の回顧録の中で詳細に記述している。前掲、『若干重大決策與事件的回顧』下巻，1070-1104頁。
- 148) 経済調整政策と社会主義教育運動の進め方をめぐって毛沢東と他の中央指導者たちの間に亀裂が入っていった経緯については、薄一波による上記の回顧録のほかに、以下の研究も詳しく論じている。前掲、『歴史的変局——從挽救危機到反修防修（1962-1965）』，151-178頁，377-419頁。
- 149) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，358頁。
- 150) 同上，360頁。
- 151) 同上，436頁。
- 152) 同上，443頁。
- 153) 同上，454頁。
- 154) 同上，457頁。
- 155) 同上，517頁。
- 156) 同上，560頁。
- 157) 同上，572頁。
- 158) 文化大革命発動に至るこうした経緯については、以下の研究などで詳細に分析

されてきた。Roderick MacFarquhar, *op. cit.*

- 159) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，359頁。
- 160) 大区とは、複数の省級行政区を地区ごとに統括する単位を指す。この時期には、中共中央地方局が華北、東北、華東、中南、西南、西北の各地区に設置されていた。それらの組織と人員については、以下の文献を参照されたい。中共中央組織部・中共中央党史研究室・中央檔案館『中国共産党組織史資料』第五巻（過渡時期和社会主義建設時期 1949.10-1966.5），北京：中共党史出版社，2000年，117-189頁。中共中央組織部・中共中央党史研究室・中央檔案館『中国共産党組織史資料』第六巻（“文化大革命”時期 1966.5-1976.10），北京：中共党史出版社，101-130頁。
- 161) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，363頁。
- 162) 同上，573頁。
- 163) 同上，594頁。
- 164) 同年9月末から10月初めにかけてインドネシアではクーデターが起こり，共産党が非合法化されて激しい弾圧を受け，スカルノ大統領は辞任に追い込まれた。
- 165) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，543頁。
- 166) 同上，333頁。
- 167) 国家計画委員会と現代中国政治の関係については，以下の研究を参照されたい。国分良成『現代中国の政治と官僚制』慶應義塾大学出版会，2004年。
- 168) こうした不満を背景として，毛沢東は腹心の陳伯達を国家計画委員会副主任兼秘書長として送り込み，状況把握を試みようとしていた（前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，402頁）。
- 169) 同上，480-481頁。
- 170) 三線建設とは，米ソ両国をはじめとする対外的脅威に備えて，西南地区や西北地区など内陸部に戦略的後方基地を建設するとともに，各省市自治区にも小三線と呼ばれる後方基地を設置して軍需工場を建設するなど，この時期から文化大革命期を中心に推進された戦争準備体制構築を指す。三線建設に関する包括的な考察としては，以下の研究を参照されたい。呉曉林『毛沢東時代の工業化戦略——三線建設の政治経済学——』御茶の水書房，2002年。
- 171) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，438頁。
- 172) 同上，444頁。
- 173) 同上，458頁。
- 174) 同上，408頁。
- 175) 同上，471頁。なお，毛沢東の意向を受けて国家計画委員会が改組された経緯については，薄一波が当事者として下記の回顧録の中で詳細に述べている。前掲，『若干重大決策與事件的回顧』下巻，1205-1211頁。

- 176) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，456頁。
- 177) 同上，457頁。
- 178) 国家計画委員会第一副主任兼秘書長，石油工業部部長
- 179) 国家計画委員会副主任，国家経済委員会副主任（1965年4月から同主任）
- 180) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，472頁。
- 181) 第三次五カ年計画の当初の構想が破棄され，毛沢東の意向に従い，戦争準備と三線建設に重点を置くものへと改変された経緯については，当事者として第三次五カ年の策定にかかわっていた薄一波による以下の回顧録が詳しい。前掲、『若干重大決策與事件的回顧』下巻，1192-1205頁。
- 182) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，471-472頁。
- 183) それと同時に毛沢東は農業機械化に関して，前出の小計委が人員を湖北省に派遣して共同で検討することに同意するとともに，各中共中央地方局と各省市自治区委も湖北省に人員を派遣して共同で検討することを提案するなどして，劉少奇に対し湖北省委の試みに見習うべきとの認識を示した（同上，564頁）。
- 184) 同上，569頁。
- 185) 同上，570頁。
- 186) 同上，401頁。
- 187) 同上，402頁。
- 188) 同上，402頁。
- 189) 同上，403頁。
- 190) 同上，406頁。
- 191) 同日には，楊尚昆の中央辦公庁主任の職が解かれ，広東省委書記処書記へ異動させられることが決まった（同上，536頁）。
- 192) 同上，542頁。
- 193) 北京市副市長，中国科学院哲学社会科学部委員，歴史学者
- 194) 1959年8月に開催された廬山会議に際して，彭徳懷は大躍進政策の是正を毛沢東に建議したことで毛の逆鱗に触れ，国防部部长の職を解任されることになった。
- 195) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，548頁。
- 196) 同上，548頁。
- 197) 新編歴史劇『海瑞免官』を執筆し暗に毛沢東を批判したとされる呉晗を指す。
- 198) 前掲、『毛沢東年譜（1949-1976）』第5巻，572頁。
- 199) 同上，572頁。
- 200) 同上，572頁。
- 201) 中央文化革命五人小組は，彭真を組長，陸定一（中央政治局候補委員，國務院

副総理，中央宣伝部部長兼文化部部長）を副組長とし，その他康生（中央政治局候補委員，中央書記処書記），周揚（中央委員会候補委員，中央宣伝部副部長兼文化部副部長），呉冷西（新華社社長，『人民日報』総編輯，中央宣伝部副部長）により構成されていた。

202) 毛沢東のこうした意向を受けて，文化大革命発動後の 1966 年 5 月 23 日には中央政治局拡大会議において，中央宣伝部部長の陸定一や北京委第一書記の彭真らの解任が決定した。

203) 前掲，『毛沢東年譜（1949-1976）』第 5 巻，573 頁。

204) 同上，581 頁。

205) 同上，573 頁。

206) 同上，583-584 頁。

207) それと同時並行で，毛沢東は上海や杭州に滞在中に，羅瑞卿（人民解放軍総参謀長）をめぐる問題いわゆる「羅瑞卿事件」に関する会合を開き，同事件の処理に関与した。それに先立ち，1965 年 12 月 1 に毛沢東が杭州滞在中に，林彪によって妻の葉群が羅瑞卿を貶める目的で派遣され，林の 11 月 31 日付の手紙と羅に関する批判材料が手渡された（同上，544 頁）。

なお，毛沢東は「羅瑞卿事件」の処理に介入することにより，文化大革命発動に対する軍の支持を取り付けたとする説については，以下の研究が詳しい。前掲，『歴史の変局—從挽救危機到反修防修（1962-1965）』，419-432 頁。山口信治『毛沢東の強国化戦略 1949-1976』慶應義塾大学出版会，2021 年，331-332 頁。

208) 1966 年 5 月 16 日に中央政治局拡大会議において採択された「中国共産党中央委員会通知」（通称「五・一六通知」）は，文化大革命の綱領的文書だとされる。